

真俗二諦論史的考察

——現代倫理観へのアプローチ——

大 谷 照 裕

一般に「倫理」とは、人のふみ行うべき道、世俗に於ける人間の行為・生活・道徳に関する正しき価値規範とされ、また和辻哲郎氏によれば人間の主体的な自己を保ちながら、人と人との間柄の秩序を維持するという「人間存在論」であると規定される。

倫理が人間存在論である限り、そこに求められるものは人間の生命の尊厳性を第一に、世界の平和、より良き社会の発展、豊かな人間関係等の実現を空極の目標とし、その理想社会実現の手段として、我々は政治・経済・科学等の社会倫理を重要視し、また我々自身の日々の生活・生きざまとしての、個人の倫理をも問題とする。

扱て、周知の通り日本に於ては、今日まで「儒教倫理」がこれら倫理観の依拠とされ、実践されてきた分けであるが、現代の日本の有り様を客観的倫理（道徳）の立場から考察するに、世俗社会は戦後の近代化の波と共に押し寄せた極端な

利益追求社会、人間疎外をもたらす無道徳な社会を形成しつつある。

更には、国家的・人種的・経済中心的社会集団と表象されるこの非倫理的現代社会は、個人の理想・主体的自己をも触み、その道徳的・社会的行動に対しても制約を加える。

従前の倫理道徳観は崩壊し、新たな倫理道徳依拠確立が急務となり、ここに仏教の存在がクロージアップされるに至る。即ち先の人間存在論と同様、人間の生命の尊厳性・幸福を目標とした、人間の真の救いを説く仏教（真宗）の中に、真実の実践論理と道義とを兼ね備えた絶対倫理構築を求めるものである。

これら宗教と世俗倫理との関係は、キリスト教史上に於ては特に近代以降、顕著に試探される所であり、激変する現代社会との対話を唯一可能とする所であるが、一方仏教の側は、塩尻公明氏の「西欧のキリスト教々団に比較して、仏教教団

は著しく見劣りがする」^③との指摘通り、現実的諸問題（世俗倫理）に答える積極性が希薄であり、特に真宗に於いて「世俗問題」は、正しく在家仏教としての必須課題でありながら、その対応の立ち遅れは否めない事実である。

親鸞は『御消息集』に於て、

「仏の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために御念仏ころにいられてまふして、世のなか安穩なれ、仏法ひろまれとおぼしめすべしとぞ、おぼえさふらふ」

と、真宗要義としての「報恩行」を「社会平和・仏法弘通」という二側面を有するものとして捉え、その実践として「自信教人信」の立場を明確にし、また数々の御文^④により世俗に対する真宗倫理観の基本構造・理解の方向性を顕示した。

しかし、現代真宗（学）に於ては時機相応する開示はみられず、「世俗倫理」と称しては単純形式的に积累や親鸞、また七祖の教えの中に適当な御文を捜し次々に引用しては、仏の「慈悲」や「無我」の名の元に「他人への思いやり」・「忍端」・「信頼」・「道徳」等の倫理徳目を全面に掲げ、過去のカリスマ的支配を現代に引きずりながら、これらを真宗世俗倫理の根幹たるものとして、無意識の内に社会に押し付けるに留まるのである。

この様に現代に於ける真宗の社会（倫理）に対するアプローチは、過去の人格的関係で結ばれた小規模社会での個人的

な救いでしがなく、社会を組織や構造や制度、更には世界観を伴った現代的視点で捉える全体的総合的観点が欠如した近代以前の対応に、今尚終始しているのが現状であろう。

確かに現代社会は、親鸞の生きた時代とは遙かに異なり、世界・人種・政治・経済的にも複雑に絡み合った機構によって成立する巨大化した有機体である。人々は日々、世俗の制度（法律）の中に生き、その一挙手一投足は絶体に政治や経済、世俗的価値とは無関係には成り立たないのである。

しかし、今日の真宗の対世俗に関する消極性を、こうした社会の目ざましき変化の故、また社会的価値観の転変に伴う仏教的規制力の減退等に全て起因するとした論は少々暴論であり、世俗に対する真宗発揮の遅滞理由はこの様な社会事情（外的要因）に少なからず関係すれども、その根本要因は真宗理解の誤信に大いに依存するものであることを、我々は認めざるを得ないのである。

前述の様に、倫理とは現実の人間存在論を問題とするものであり、その規範はあくまでも「現世」に基礎を置くもの、即ち、倫理とは「現実社会の肯定（俗諦）」を大前提とする所に成り立つものである。この倫理に対し、現世を「それごと、たわごと、まことあることなき」と否定しつつ、その報恩実践として「社会平和・仏法弘通」という二つの側面を有するものとして捉えた深遠なる親鸞思想の史的誤用・即ち真

宗(親鸞以後)の二元論的発想がここに問題とされるのである。それは即ち「真俗二諦」の問題であり、現代倫理観考察に当たり、早急に克服すべき真宗最大の課題であると確信する。

そこで今回の研究発表に当たり、この真俗二諦論に対し、現代倫理観へのアプローチとして、若干の史的考察を加えることにより、現代に於ける真宗の対世俗問題の取り組みを再認識するものである。(尚、紙面の都合上その研究プロセスは割愛させて戴く。)

周知の通り、時代は真俗二諦に於て、仏法・王法を論じ、その関係を鳥の翼・車の両輪に例え、世界を「真なるもの(真諦)・「俗なるもの(俗諦)」との二つの領域に分別し、その二諦相資相依の関係を明かすことに於て、時の権力との共存を計るのである。

しかし史的考察を加えるに、そもそも親鸞にはこれらの分別は存するものでなく、「真諦」とは社会一般(全体)が真宗の表象を推蔽・鍊成するものであり、そこには共同の伝統や感動及び意義ある対象に関する感情等、あらゆる種類の集合的状态が関与し構成されるものである。一方「俗諦」とは我々が地域社会、また各々自己の感覚や経験の所与をもって、独自に真宗をこの個人的印象を素材として構成されたものである。即ち、この二諦論はその認識主体が「全体」と「個人」

という違いこそ在れ、世俗サイドの一般的真宗認識論に他ならず、そもそも真の真宗的世界観(仏・親鸞の次元)に於ては、この二諦は分別なく同義である。

ここに従前の真俗二諦に関する諸論を再考し、一元論や二元論でもない新たな第三の道を模索し開示することにより、はじめて真宗現代倫理観へのアプローチが可能となるものと確信する次第である。

1 R・タゴール、F・フェンツル、E・ゴンゼ、清沢満之、西田哲学等の主張する所。

2 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』M・ウェーバー等の諸論参考。

3 『社会改革と宗教的真理』

4 『真聖全』697頁

5 『真聖全』59・98・154・165・199・527・682・690・691頁等

6 とかく「死後」を問題とし、仏教を厭離穢土・欣求浄土的思想とする社会認識にも起因すると思われる。

7 明治二年九月発布、広如上人御書以後顕著にみられる。

8 「真俗一諦・真俗並行・真俗関連・真諦影響・俗諦方便説」等の諸論をも含め

△キーワード▽ 真俗二諦、倫理、世俗

(龍谷大学研究生)